

図書館通信

第 14 号 7 月 1 8 日 (金)
名古屋経済大学
高蔵高等学校・中学校 発行

「土日の読書会」が開催されました！



高蔵父母懇談会が主催する「土日の読書会」が、7 月 5 日 (土)、図書館 2 階・多目的コーナーにて実施されました。生徒・保護者・教職員などを合わせて、**19 名**の方々が参加されました。「メンバーがいつもより多く、幅広い年代の人たちのおすすめ本を聞くことができ、楽しかったです」。生徒がこのような感想を記している通り、今回の「土日の読書会」も盛況でした。参加された皆さま、ありがとうございました。以下に、参加者の感想を一部抜粋して紹介します。充実した読書会であったことが、よく伝わってきます。

★皆さんの読書体験やおすすめ本の話をお聴くと、読書欲がさらに高まります。今日も楽しい読書会でした。(教員)

★たくさん本がある中で、読んだことのある本を紹介されると、うれしいです。読んだことのない本、自分では選びそうにない本を熱く勧められると、読んでみたくなり、本当に新鮮です。(保護者)

★読んでみたい本のストックがたくさんできました。子どもにも勧めたいと思います。(保護者)

★新しい本ばかりではなく、古い本や知っている著者の本の紹介も興味深かったです。(保護者)

<読書会で主に紹介された本>

瀬尾まいこ『戸村飯店 青春 100 連発』(文春文庫)	伊坂幸太郎『死神の精度』(文春文庫)
柚木麻子『ナイルパーチの女子会』(文春文庫)	重松清『とんび』(角川文庫)
塚本康浩『グチャクはただが役に立つ』(幻冬舎文庫)	有川浩『図書館戦争』(角川文庫)
田中芳樹『銀河英雄伝説』(創元 SF 文庫)	村田沙耶香『信仰』『コンビニ人間』(文春文庫)

さて、紹介しておきたい本があります。谷原つかさ『「ネット世論」の社会学 データ分析が解き明かす「偏り」の正体』(NHK 出版新書、2024 年)です。本書はソーシャルメディアの中でも X (旧 Twitter) を対象に取り上げ、「定量的なデータに基づいて、日本のネット世論の構造、分布、実態、影響を明らかにしています。そこで得られた主な知見が、①「怒り」の感情をかき立てるようなネガティブな記事が、ソーシャルメディア上では投稿・拡散されやすい、②少数のアクティブなユーザーがそれらの記事をつくりだしているので、「ネット世論」は「実際の世論」から大幅にかい離している、というものです。「ネット世論」は、いわば負の方向に偏っているわけです。そんな「ネット世論」に振り回されないようにするためには、どうすればよいか。著者は「事実」と「意見」を区別する「メディア情報リテラシー」を高めるべきだと言います。つまり、発信者がどんな「事実」に基づいて、どのような「意見」を訴えているのかを見極め、「事実」が正しいかどうか、その根拠となる「出典」に注目する必要があると論じます。私たちがソーシャルメディアを利用する中で、日々感じていることが、客観的なデータ分析により可視化されており、知的興味を刺激される一冊です。



高蔵図書館Instagramはこちら⇒

TAKAKURA_LIBRARY



お知らせ

先日の学年行事日に、**名古屋市科学館**を訪れました。その時、目に飛び込んできたのが、特別展「**古代 DNA—日本人のきた道—**」の案内です。近年、大きな注目を集めている遺伝人類学。それは人骨から採取した DNA を分析して、人類進化の過程を科学的に解明する学問です。ノーベル生理学・医学賞を 2022 年に受賞したスヴァンテ・ペーボは、ネアンデルタール人のゲノム解読に初めて成功した遺伝学者です。彼の自伝ともいえる『**ネアンデルタール人は私たちと交配した**』（野中香方子訳、文藝春秋、2015 年）は、読み物としておもしろいです。この分野について、たくさん本が出版されていますが、次の 3 冊を紹介しておきます。**石浦章一『王家の遺伝子 DNA が解き明かした世界史の謎』**（講談社ブルーバックス新書、2019 年）、**太田博樹『遺伝人類学入門—チンギス・ハンの DNA は何を語るか』**（ちくま新書、2018 年）、**篠田謙一『人類の起源 古代 DNA が語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』**（中公新書、2022 年）です。今回の特別展の開催期間は、明日 19 日（土）から 9 月 23 日（火・祝）まで。夏休みの自由課題として見学してみませんか？

DNAで探る あなたのルーツ

遺跡から発掘された古代の人々の骨に残るごく僅かなDNAを解読し、人類の足跡をたどる古代DNA研究。近年では技術の発展とともに飛躍的な進化を遂げ、ホモ・サピエンスの歩んできた道のりが従来想像されていたよりもはるかに複雑であったことが分かってきました。本展では、日本各地の古人骨や考古資料、高精細の古人頭骨CG映像などによって、最新の研究で見えてきた遥かなる日本人のきた道と、集団の歴史が語る未来へのメッセージを伝えます。

01 今もなお現代に残る縄文人のDNA

旧石器時代から古墳時代まで、
ゲノム解析の最新研究成果で古代人の謎に迫ります。

日本最古の
土偶



02 考古学×自然科学

折り、なりわい、交流。
最新の考古学とDNA研究で、
2万7000年の時を超えて
古代人の姿が見えてきます。

住居址D1-86から出土した最古段階の土偶
縄文草創期、1万3000年前 滋賀県相谷熊原遺跡 滋賀県



船泊遺跡23号人骨
復顔（DNA情報に基づいて作成）
国立科学博物館



発掘した古代人の
頭骨から制作した超高精細CG

03 国立科学博物館×NHKの8K技術

国立科学博物館とNHKの8K技術を利用した共同研究の成果を活かし、
超高精細CG映像を駆使して、日本人のきた道をたどります。

MESSAGE

今世紀になって急速に発展した古代ゲノム解析は、我々ホモ・サピエンスの起源とアフリカからの拡散の状況を明らかにしつつあります。

この解析技術によって、これまで人骨の形態から類推されてきた日本列島集団の成立史も、ゲノム解析で得られた精緻なデータによって補完されるようになっていきます。この学問の驚異的な発展は、検証が難しかった考古学や歴史学のデータと集団成立のシナリオの整合性の検討も可能にしました。列島内の文化が変わるとき、それを担った集団の遺伝的な特徴も変化したのでしょうか。今や列島集団の成立の研究は、新たな段階に入っているのです。

本展覧会では、4万年に及ぶ日本列島集団の成立のシナリオを、人骨とそこから得られた最新のゲノムデータ、そして最新の考古学研究の成果で解説します。

【総合監修】国立科学博物館長 篠田 謙一

講演会 7月27日(日)、講師は篠田 謙一・国立科学博物館長。
詳細は6月中旬に公式サイトで発表します。

04 ヒト×イヌ・イエネコ

古くから人類とかがわりが
深いイヌやイエネコの渡来の
歴史や暮らしぶりにも迫ります。



ニホンオオカミの剥製
国立科学博物館

動物足跡付須恵器(部分)
古墳終末期、6世紀末～7世紀初頭
兵庫県見野6号墳
姫路市教育委員会

